



町民文芸

只見短歌会 令和六年九月詠草

久々に押し車にて外出す一瞬なりし涼風やさし

関谷登美子

草むらに支えられしか花々の野に咲く様をほのぼのと見る

目黒 富子

背丈より大きな枝を引つ下げて歩む二歳児気分は勇者

立花 奏音

久々にストレッチして身に詰まる邪魔な腹肉いつまで続く

新国由紀子

余裕なきこの人生を変へたくもなかなか変はらぬ不器用悔やむ

渡部ヨリ子



只見俳句会 九月定例会

日高俊平太 指導

日に二回ときに三回シャワー浴ぶ
秋分や縁者はさらに遠くなり

恒 夫

十五夜や月出なくとも手を合わせ
大相撲郷土力士の白星よ

一 穂

懐かしき声聞く村の墓参り
語り部の唇震え終戦忌

修 一

秋晴れや天下無双の大の里
渋滞の車窓に映る満月よ

信

戦争の事親子で話す盛夏かな
夏雲や病院帰りの杖の先

都

フロックス盆に咲き満つ休耕田
盆終わる手作りケーキ出し忘れ

真理子

夏虫や声は聞えど夕涼み
里イモ畑カエルの親子宿帰り

睦 子

